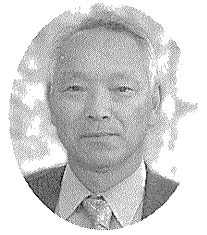


ずいそう

高嶺の花を求めて

丹野光正



「高嶺の花」との出合いは簡単では無かった。父の死後、母の故郷に移り住み、ようやく庄内弁にもなじんで新しい故郷の原風景ともなっていたのは、平野を守る背の高い見事な黒松の防風林であり、西裾を日本海に洗わせ、東に出羽丘陵を従え平野の北に悠然と孤高を誇る出羽富士・鳥海山であった。

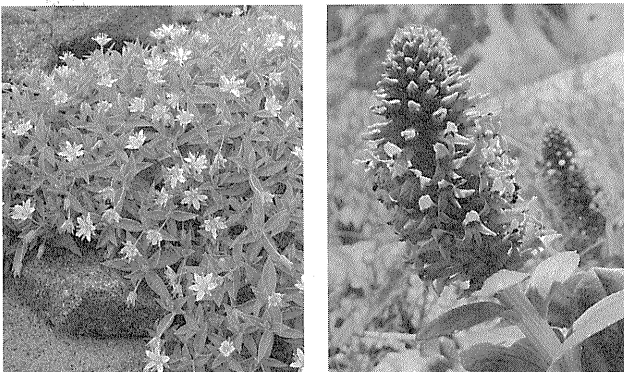
「高嶺の花」との出合いは、昭和25(1950)年、中学1年の夏休みに学校恒例の鳥海山登山があって、配られたガリ版刷りの資料に、この山の特産種として「チョウカイフスマ」という花も載っていた。

煙にむせる始発の汽車に乗り、秋田との県境に近い海沿いの吹浦駅で降り、大物忌神社に詣でて朝食を済ませると、標高差約2,200m余もの山頂目指して登山始めた。当時の登山はリクレーションではなく神聖な参拝であり、菅笠に草鞋、雨具は蓑の二つ折りに金剛杖という装束、握り飯と水筒、三食分の米持参であった。

六合目あたりから視界ゼロに近い濃いガスに雨も交じり、氷雪や強風など過酷な環境の中で個性的な花を華麗に競う高山植物を楽しむ余裕もなく、ただ濡れた岩の道を登山続け、じつとりと全身が濡れたみすばらしい有様で山頂直下にある神社の宿舎に着いたのはもう夕方であった。

翌日も濃霧と強風のため、御来光を拝むどころか山頂にも登れず、滑る足許を気にしながら山麓の南鳥海駅までの長い道をひたすら歩いて帰ったのである。翌年の登山も天候に恵まれず、この山にしかないという「チョウカイフスマ」を見る余裕もなかった。

その後就職し、同僚達といろんな山に登るにつけこ



チョウカイフスマ(鳥海山)(左)とウルップ草(白馬岳)(右)

の花は、高山植物の図鑑を見ては思う「久遠の花—高嶺の花」となっていた。

いつしか16年もの歳月が流れた。親馬鹿丸出しで我が子の安産祈願を鳥海山頂の大物忌神社でと決め、仙台から50ccのバイクで出掛けて登山参拝を済まし、遂に「高嶺の花」に会うことができたのである。

2cmにも満たないナデシコ科のこの花は、真っ白い先鋭の五弁花で、霧露に濡れ岩礫の間に展開する様は将に「高嶺の星」であった。

鳥海山の見えるところが良いと晩年まで酒田で過ごした母も、一昨年春に米寿で逝った。昨年のお盆、お骨の一部をこの山のお花畑に散灰するために登山、山頂の神社に詣でて、心地よい快晴の外輪山で「高嶺の花」と久しぶりに会うことができた。

50年余の歳月が流れていた。

今では、道路が整備され観光開発が進み、誰もがたやすく高山に登り、あるいはTV等の映像を通して高山植物を目にすることができる。深田久弥著「日本百名山」や田中澄江著「花の百名山」に続き、昨年には各県の代表的な山を入れて組替えた宮崎元郎の「新日本百名山」が発表された。健康指向あるいは少年時代への回帰なのか中高年のグループ登山が増えている。私はマイペースで登山休み、目指す高山植物を好きなだけ写真に撮る独登を選んでいる。

昨夏、槍ヶ岳は濃霧だったが、白馬岳では丸い照り葉にヒヤシンスに似た青い花を立てるウルップ草に会えた。早池峰山ではエーデルワイスに最も近いという白いフェルトのハヤチネウスユキ草や菜の花に似た黄色いナンブイヌナズナに会ってきた。一昨年は飯豊山の稜線で青く鮮やかなタカネマツムシ草を、大朝日岳の雪渓傍で日の出の冷気に震えながら真っ白い花を紅色に染めていたヒナザクラなど…。「高嶺の花」を求め背に重いリュック、首にカメラを友に独登は続く。

昨秋来、家内が体調を崩してしまった。

登山は4K(K:お金, K:休暇, K:気象, K:健康)のバランスが必要なのだが、KK(家内・家族の健康)も重要である。今年の遠征登山は…無理かな?